

ご自由にお持ち帰りください。

生涯学習

とっとり

鳥取県教育委員会発行
2016.11 霜月

167

鳥取県内の生涯学習講座が満載！

ページ

1 特集

元気な高齢者が活躍する自主防災組織

こしが丘自治会

3 鼓笛隊 12年ぶりに運動会で復活！
船岡小学校統合わくわく実行委員会

4 とっとり県民カレッジ連携
生涯学習講座情報（11・12月）

26 連携講座 おすすめピックアップ

27 鳥取県立生涯学習センター（お知らせ）

28 魔法の板「カブラ」で遊ぼう！ 講座の様子

29 電子メディアとうまくつきあおう
とっとり県民カレッジで熱心に学ばれた皆さんをご紹介します

31 サイエンスカフェ鳥取 2016



『切り絵シリーズ』 ランキョウの花（鳥取市）

小さな花が集まった一本のランキョウの花。それが何万本も咲き誇り、まるでピンクのジュータンのようです。花の少ないこの時期の癒しの風景です。

絵・文：紙原 四郎氏

元気な高齢者が活躍する自主防災組織



平成27年度
鳥取県自主防災
組織等知事表彰
【功労表彰】

こしが丘自治会

「こしが丘自治会」は、こしが丘友の会（老人クラブ）と連携し、要援護者の把握、要援護者を対象とした避難訓練や防災知識の普及啓発などを重点的に行い、自主防災組織を整備して自主防災に努めています。自治会長ほか2人の方にお話をうかがいました。



友の会副会長
おかもと ほるゆき
岡本 治幸 さん

こしが丘自治会長
なかむら まさみち
中村 正道 さん

友の会会長
せ やましようはちろう
瀬山 正八郎 さん

友の会が中心となり、要援護者を把握

伯耆町大殿にある「こしが丘団地」は、JR伯備線岸本駅から歩いて約20分のところにある閑静な住宅街です。「こしが丘自治会」は、昭和49年9月に発足。現在、約190世帯、住民約590人が居住し、高齢化率は約27.3%の地域です。

県は、地域住民が主体となって、「支え愛マップ」づくりを行うことを通じ、障がい者や独居高齢者等に対する災害時避難支援の仕組みや平常時の見守り体制を整備し、要援護者が身近な地域で安全安心に暮らすことができるように、「わが町支え愛活動支援事業（現、わが町支え愛マップ推進事業）」を平成24年度から実施。これを受けて同自治会は、平成24年6月から「こしが丘友の会」（以下「友の会」）と連携して、この活動に取り組むことになりました。

最初に、伯耆町が平成21年度から作成している「災害時要援護者台帳」への登録に向けて、登録希望のあった該当者一人ひとりに聞き取り調査をしました。こしが丘団地では、どのような要援護者がいるのか、友の会の役員が手分けをして把握に努めました。平成24年8月、「災害時要援護者台帳」が完成し、草取りや電球の交換、雪かき、買い物支援などの見守り活動を始めました。

火災に直面し、自主防災組織体制を確立

活動を始めた矢先、平成25年4月、団地内で火災が発生。不幸なことに火元となった家の方が亡くなりました。当時の自治会長で、現在、友の会副会長を務める岡本さんは、「火災は夜中に発生し、不意を突かれた感じで何もできませんでした。『まさか、ここで！』という感じでした。家は焼け、携帯電話も焼けてしまったため、その家族は親戚とも連絡が取れず、行き場がない状態でした。私たちは対応に困り、役場に相談しました。役場から毛布などの必需品を支援してもらい、公民館を一時避難所として利用しました。仮住まいが決まるまで、私たちはその家族に寄り添っていました」と当時の様子を振り返ります。また、現自治会長である中村さんも、「同じ自治会の仲間が亡くなった。こんなことは二度とあってはならない。自分たちで何とかしなければ！」と日頃からの備えが必要だと痛感したと話します。

この火災を教訓に、何をすべきか検討しました。その結果、同自治会には災害時や緊急時に対応できる組織がないことや、平日の日中は住民のほとんどが勤めに出ていて、家にいるのは高齢者や女性がほとんどで、有事の際には対応が困難だということが浮き彫りになりました。この状況を改善するため、

友の会会員の中の元気な高齢者が立ち上がりました。友の会会長の瀬山さんは、「以前は、友の会と言えば、会員同士の親睦を深めることが目的でしたが、これからは元気な高齢者が地域を支える時代。自分たちが頑張らないと！」と話します。

平成 25 年 8 月、同自治会は友の会と連携して自主防災組織を結成。公民館を対策本部として、自主防災組織体制を整備しました。

本部長は自治会長、副本部長は自治会副会長、総務班長は自治会総務部長と友の会会長。情報班長には自治会副会長と友の会副会長、子ども会部長。救護班長や避難・給食班長には自治会の他の役員を割り当て、それぞれの役割を明確にしました。

また、災害時に要援護者の避難が迅速にできるように、「要援護者・一人暮らしマップ」を作成しました。同自治会は 7 班あり、現在、23 名の要援護者がいます。対策本部となる公民館は、団地のはずれに位置するため、公民館から遠くにある班の住民は、要援護者を連れて避難するのは容易ではありません。このため、班ごとに支援者を決め、1 次避難場所を定めました。こうして各班を小さな単位の自治会として機能するように整備しました。そして、自主防災組織図とマップを全戸配布し、住民に説明をして協力を求めました。

しかし、このように整備したものの、果たして有事の際に機能するのか不安がありました。岡本さんは、「災害はいつどこで起きるかわかりません。住民一人ひとりが日頃から心構えをしておかないと！」と住民の意識改革の必要性を語ります。

春秋の防災訓練に加え防災知識の普及啓発も！

同自治会では、春と秋の 2 回防災訓練を行います。春の訓練は、友の会主催で平日に実施。今年は、消防士を招いて消火訓練をしました。また、町社会福祉協議会の職員も参加して、車椅子を使って要援護者を安全な場所に避難させる訓練をしました。秋の訓練は、町主催で休日に実施。今年は、訓練終了後、自治会主催で防災についての講習会も実施しました。

友の会としても、訓練の前の月には、毎年ビデオ研修を行っています。今年は、阪神淡路大震災について学習しました。その他、定期的に講師を招いて、防災や高齢者が安心して暮らせるまちづくりなどをテーマに学習をしています。日頃から学習をしていると防災意識が高まり、訓練にも真剣に取り組むことができます。

日頃からの人間関係が力を発揮

近年、同自治会は世帯数が増え、顔見知りでない住民もいて、地域の結び付きが希薄化しています。「日頃から人間関係ができていないと、災害時対応や支え合い活動は、うまくいきません。支えますよと言っても受け入れてもらえない場合もあります」と岡本さんは危惧します。助ける人(命を預かる)と助けられる人(命を預ける)との信頼関係が重要です。

そのため、平成 27 年から要援護者と支援者の懇談会をするようにしました。しかし、懇談会では話にくいのか、活発な意見交換がされません。

そこで、懇談会とは別に、年 2 回食事会もするようにしました。瀬山さんは、「ワイワイ言いながら食事を一緒に作ると、次第に打ち解けて、お互い気軽に話ができるようになりました」と取組の成果を話します。

課題は住民の防災意識を高めること

10 年後、自治会の大半をしめる団塊の世代は、70 歳代後半。全体的に高齢化が進み、要援護者や空き家が増加すると予想されます。その時には、今の防災体制では立ち行かなくなるかもしれません。地域の実情にあった防災対策が必要となります。今後、どのように住民の防災意識を高め、体制づくりをしていくのかが大きな課題となっています。

中村さんは、「避難訓練も毎年しているとマンネリ化します。その都度、課題を見つけて訓練や学習をしていこうと思いますが、なかなか難しい」と継続することの大変さを話します。「でも、行政に頼っていても、以前火災が起きた時のように、いざという時に対応できない。やはり、自主防災は必要！継続しなくては！」とみなさん。「自分たちの地域は、自分たちで守る！」。固い決意が伝わってきました。



避難訓練の様子



秋の防災訓練（消火訓練をする住民）



要援護者との食事会（非常食づくり）

学校

家庭

地域

連携

船岡小学校
統合わくわく
実行委員会

鼓笛隊12年ぶりに運動会で復活！



40年もの間、八頭町立船岡小学校運動会の恒例演技であった「鼓笛隊」。児童数の減少などの影響により12年前に途絶えた「鼓笛隊」を復活させた、「船岡小学校統合わくわく実行委員会」の取組についてご紹介します。

最後の運動会で大人の鼓笛隊をやろう！

この委員会は、八頭町の小学校再編に伴い、平成29年春に閉校する船岡小学校を最後まで盛り上げ、船岡、隼、大江の3校統合に向け「わくわく」した未来につなげたいとの思いから、平成27年の春、同小の保護者と地域住民の有志25名で結成して閉校記念事業に取り組んでいます。

この年の秋、委員会で「最後の運動会で何をしようか？」と話し合った時に、「運動会といえば鼓笛隊」「もう一度やりたい！」「大人の鼓笛隊！？面白い！大人のポンポン隊、見てみたい！」という声が上がりました。

幅広い世代から反応が！

学校を通して、隊員募集のチラシを全戸配布してもらおうと、地域の幅広い世代から反応がありました。「最後の運動会のために帰ってきて参加したい！」という県外の大学生。子どもの頃一生懸命やったことが懐かしく思い出され、いてもたってもいられなくなったという卒業生。67歳のトランペッター。また、30年もの間、家の押し入れに大事にしまっていた息子さんの鍵盤ハーモニカを「是非使って下さい」と提供された方もいました。

温かい地域の方の思いを受け取ったことで、「絶対このイベントは成功する！」と確信しました。

プロモーションビデオを制作！児童に呼びかけ

以前同校で鼓笛隊を指導された元校長の中田良子さんと音楽指導をされた村上有子さんが協力してくださることになり、平成28年2月から練習を開始。ドラム隊、鍵盤ハーモニカ隊、ポンポン隊を結成し、「優船隊」と命名。少しずつ仲間を増やし、約30人が毎週土曜日の夜に集まって音合わせをしました。最初のお披露目は、5月の船岡地区敬老会。会場からは「懐かしい」「がんばれ」と声がかかりました。

9月4日の運動会の2ヶ月前、目標としていた80人が集まらず、「大丈夫だろうか？」と次第に不安が募ってきました。そこで、学校にも協力を求めることにしました。実行委員が学校に赴き、これまでの取組や大人たちが鼓笛隊にかける思

いをまとめたプロモーションビデオを上映し、直接児童に「最後の運動会で鼓笛と一緒にやろう」と熱く呼びかけました。その結果、学校側の理解もあり、「全校児童106人でやろう！」ということになりました。

鼓笛隊復活で気持ちがひとつに！

運動会当日まで、残り1ヶ月。大人たちは公民館で週2回練習し、子どもたちは学校で自主練習。運動会直前に先生方の協力を得て、校庭で総練習をしました。

ついに本番、運動会当日。なんと総勢170人での行進になりました。行列の中には鍵盤ハーモニカを演奏される校長先生や以前勤務されていた先生の姿もありました。観客からは温かく心こもった拍手が送られ、昔を思い出して目頭を押さえる方もありました。

宮田実実行委員長は、「ドラムマーチのリズムに心を合わせ、再び鼓笛隊を通じて学校、保護者、地域が気持ちを通わせることができた。大変だったからこそ感動がある。大成功でした」と充実感いっぱい。山崎泰央校長は「ここ船岡には楽しい方が多くおられて、学校を支えてくださるのでありがたい」と言われます。この絆を大切に、これから閉校に向けて、みんなの心に残る思い出づくりをしていきます。

(寄稿：船岡小学校統合わくわく実行委員会副委員長 福本揚子さん)



パレードを終えて